

お盆の物語をご紹介します。
はるか昔のこと。インドの街、舎衛城（しやえじょう）のはずれにある祇園精舎を歩く一人の僧がありました。僧の名は目連（もくれん）と言います。お釈迦さまのお弟子の中でも十本の指に入るくらいお坊さまでした。

「なんて気持ちの良い朝だ」
目連はつぶやきました。長い雨期の修行を終え、久しぶりにあお空でした。精舎の木々が枝をさやさや鳴らしています。風も、日の光も鳥も、花も、すべてがやさしく目連の心に映りました。

「お母さんはどうしておられるのだろう。ふと今は亡き母の顔が浮かびました。目連は木の下に坐すと、静かに瞑想に入りました。神通第一とうたわれた目連です。あらゆる世界を見通す天眼をもって、母の姿をさがしました。」

あんなにやさしかったお母さんだから、きっと良いところへ行っておられるはずと思い、探します。どこにもいません。まさか修羅界、畜生界に。どこにもいません。餓鬼界を見た時

お盆の物語

信楽 晃仁

安楽寺寺報

聞光

第100号 救喜会号

発行所
〒737-0054
吳市上山田町2-28
安楽寺
TEL: 0823-21-7561

懐かしい声にふり返ると、そこには餓鬼の姿に変わり、はてた母が立っていました。目連は神通力を使い、ごはんを盛った鉢を現し、母の前にさしだしました。

「さあ、これを食べて下さい」



「あ、お母さん」
思わず目連は叫びました。餓鬼道に落ち、飢えと渇きに苦しむ母の姿が見えたからです。

なんと悲しいことでしょう。自分を産み、育ててくれた母が餓鬼道に落ち、こんな責め苦を受けているとは。目連は神通力を使い、急ぎ餓鬼道に下りました。餓鬼道は、たいそう恐ろしいところ。それは地下の深いところであり、そこには食べることを許されず、骨と皮ばかりにやせこけ、腹だけが山のようにふくれあがった人々が針金のように細い手足をひきずり、さまよい歩いています。

「ああ、水がほしい」
「食べものをくれ」
悲しい声が地底にこだまし、いつ果てることもなく、続いています。そのありさまは、とても言葉では言い表すことのできない、むごい光景です。

餓鬼道に舞い降りた目連は、必死に母をさがし求めました。

「お母さん、目連です。お母さん」

目連は再び神通力を使い、祇園精舎に着いた目連は、お釈迦さまを訪ね、この出来事を涙ながらに語りました。

「母は餓鬼道に落ち、無量の苦しみにさいなまれております。私の神通力をもってしても、一粒の飯さえ食べさせることはできませんでした」

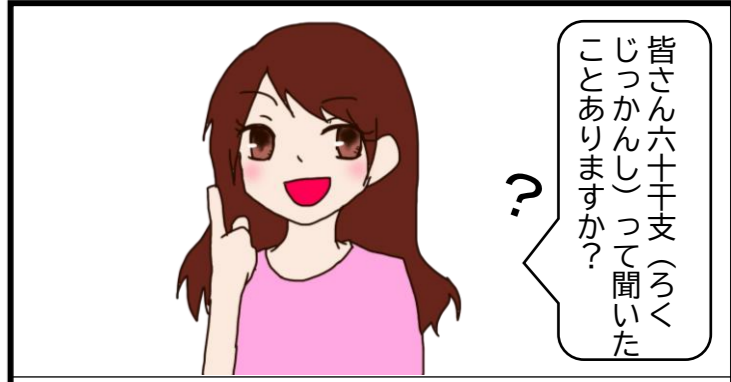
お釈迦さまは、おっしゃいました。

「目連、あなたの母は、生前欲をむさぼり、物を惜しんだ罪により、死後、餓鬼道に落ちたのです。あなたの孝順の力が天地をゆるがすとも、あなたひとりでは、母を救うことはできません。さいわい雨期の修行を終えた僧たちが、もうすぐこの精舎に集まってくる。その僧たちに供養し、ともに念ずれば、あなたの母も餓鬼道から救われることでしょう」

目連はお釈迦さまの言葉に従い、僧たちを集め、供養の大会（だいえ）を催しました。その功德により、目連の母は餓鬼の苦しみを救われ、天上界に生まれ変わることができました。それを知った目連は、小躍りをして喜んだそうです。

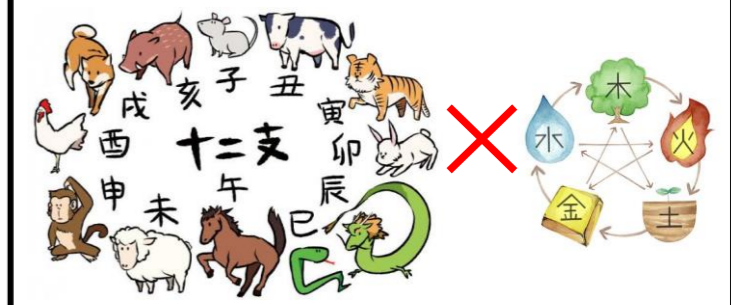
安楽寺マンガ通信

その50 信楽めぐみ作



この言葉は、十二支と陰陽五行説と組み合わせた中国の暦の考え方を表す言葉になります。

この考え方では干支は12種類ではなく、計60種類あると考えられるため、生まれた年の干支に戻るのは60歳になった時とされています。



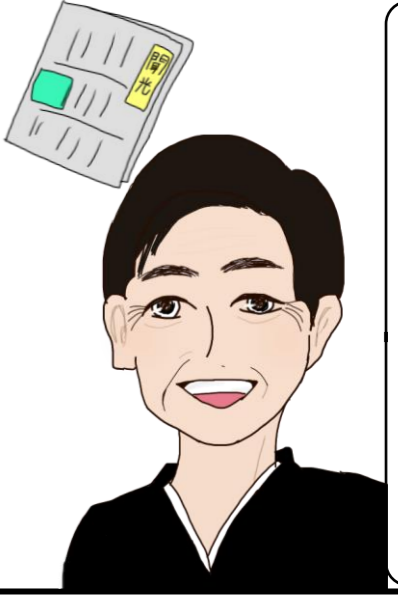
また、長寿のお祝いとして赤いちゃんちゃんこが贈られるのは、もう一度赤ちゃんに戻って生まれ直すという意味が込められています。

なので、還暦は「暦が還った年」としてお祝いされているそうです。



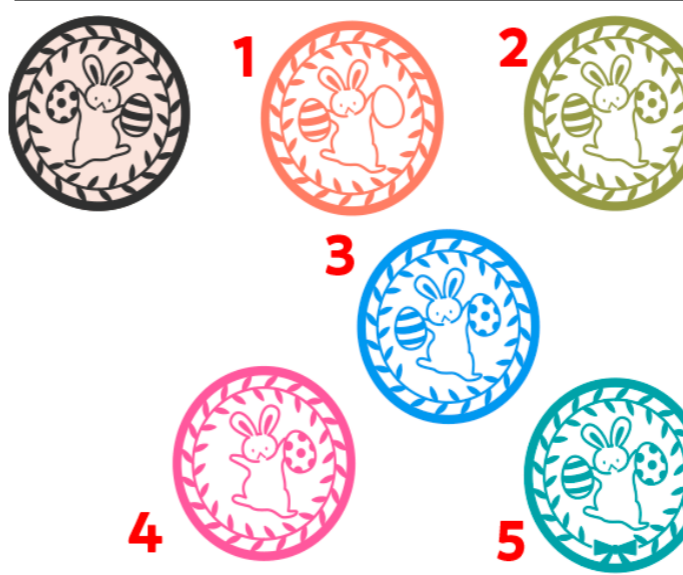
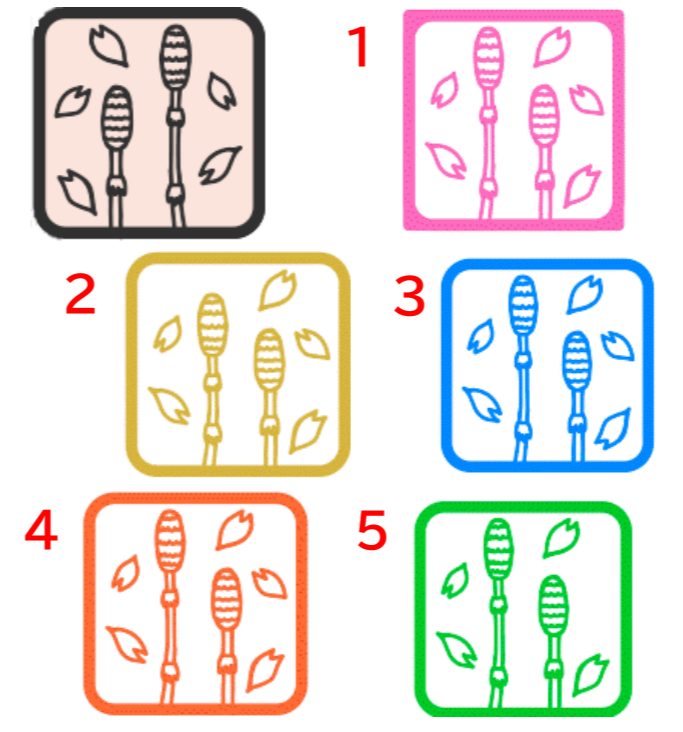
今年の6月に住職が60歳となり、今号で聞光は第100号となりました。どちらにも区切りの時です。

住職には元気に、大還暦(120歳)を目指してもらい、聞光は初心に戻り皆さんに楽しんでもらえるものを作りたいと思います。



ちょっと脳トシ

正しいスタンプはどれでしょう？
下の黒枠の2つのスタンプを押したら1~5のどれになるでしょう。



今回の聞光では、私は今まで物事に對して決めつけて自ら固定概念を作っていたのだと実感しました。1面のお盆といえば先祖を供養するもの、2面の仏様といえば盲目的に信じるもの、4面干支といえば12種類など。一度知った物事に対して、よく調べもせず、そういうものだと思ってしまうようになっていました。

これからは、物事を決めつけるのではなく、柔軟に、様々なことに「縁を感じ、色々な意見を取り入れていきたい」と思いました。

皆さんも、もしかしたら知らず知らずのうちに思考が凝り固まってしまうのうかも知れませんが、その固まった思考を脳トシでもして柔軟にしてみませんか。

編集後記

星乙：キカレ 星ケ：7>C&景074聞光Cキダ

この物語は「仏説孟蘭盆経（ぶつせつうらぼんきょう）」に記されています。後に、このお経をもとに毎年法要を行い、それを「孟蘭盆会」と呼びました。

この物語のどこに私たちは焦点を当てるのでしょうか。最初の餓鬼道の母と目連尊者に注目し、私たちが目連のところ立ち、先祖を餓鬼道の母にみたてて、だから供養をしなければならぬと考へて、お盆の法座を「施餓鬼会（せがきえ）」と呼ぶところもあります。しかし私たちの日々の暮らしや能力を振り返ってみて、私たちは本当に目連の立場なのでしょうか。私たちが日々むさぼりの心を起し、餓鬼に等しい生き方をしています。また、今救われなくてはならないのは誰かと考えると、決して先祖ではなく、この私です。私は目連の立場ではなく、餓鬼の母こそが私の姿ではないでしょうか。その私が救われていくお盆の法座が、今ここに届けられています。それは先祖が届けられてきたのです。餓鬼の苦しみの中にいる私が必ず救われて、お浄土に生まれることのできる道がここに開かれています。

このお盆の物語は、私のために説かれたお話でした。

浄土真宗では「孟蘭盆会」を「歡喜会」と言い、喜びの法会とします。お釈迦さまの説かれる教えにより目連尊者と母が救われたように、先祖と私が救われていく教えが届けられた喜びの法要です。

今年のお盆も大切にしておつとめたいと思います。



一枚の写真

信楽 慧



東京ではオリンピックの開催、コロナウイルス感染者の急増など不安なニュースが続きますが皆様がいかにお過ごしでしょうか？

この写真は、京都に住んでいた頃によく行っていた「琢磨」という割烹の写真です。今ではコロナウイルスの影響で中々飲食店に行くことができませんが、飲食店のカウンターに座って大将から色んな話を聞きながらご飯とお酒を楽しむということは、とても楽しく、色んな気付きやご縁をもらっていたんだなと実感する日々です。

今回の聞光では、僕が祖父の本など仏教・宗教の勉強を始めて、一番衝撃を受けた話をしたいと思います。

それは、祖父の本に「仏教とは、存在しているかどうか分からない仏様をただただ盲目的に

信じるというものではない」と書いてあったことです。

この言葉は、安楽寺というお寺の跡取りとして生まれ、得度で仏教をまなびながらも心の奥底に「仏様を盲目的に信じることに對して違和感」を持ちながら生きてきた自分にとって、救いとも言える「気づき」の瞬間でした。

恥ずかしい話ですが、お寺の息子として生まれて30年ほど、本当の意味で仏教を信じていることができていなかったと思いますし、今後本当に信じられるという気もしていなかったように思います。それは、得度のときも、これまで聞いてきたお説教でも、ただその場において、得度やお説教を体験・聞かせてもらっているだけで、本当の意味で仏法に出会ってはいなかったのかと思います。

それは、自分の中に受け入れる素地がなかったということもあると思います。様々な方、機会に恵まれて、「仏教とは仏様をただ信じるものではない」ということを知り、自分の心の奥底に持っていた違和感がなくなり、本当の意味で仏道の入り口に立つことができた気がしています。この「気づき」を得られたことは、本当にご縁の力だと感じています。

そして、この「気づき」こそが小さな悟りであり、様々なご縁によって「気づき」を繰り返していくことが、仏教においてとても大切なことだと思っています。

祖父の本にあったように、仏教は「気づき」の宗教であり、人との出会い・ご縁がとても大切だということを実感することができました。

ご縁によって気づかせてもらった自分ですが、次はどなたかの「気づき」のきっかけとなることを想い、ご縁を大切に生きていこうと思います。

お念仏のしずく

育つということ……



人間は人間に生まれたから人間なのではありません。人間は人間に生まれるとともにお育てをいただいたという努力と、人間になるためのお育てをいただける人間はもともと、心の底に、地獄や餓鬼や畜生の心をやどしているものなのです。だから、もしも私たちが生まれたまま、何のお育てもおいただかないとすれば、私たちの生活は、必ずおそまつな地獄や餓鬼や畜生の世界に転落してゆくでしょう。人間は人間であるうとするかぎり、つねにたえず、まことの人間になるための教えを学び、道を求めねばならないのです。人間というものは、もともと教えを学ばなければならぬ存在なのです。そういうよう

な、人間がお念仏の教えとは、まさしくこのような、人間がまことの人間になる、まことの人生を生きていく道を指し示すものであります。真宗では、まことの人間になってゆくことを、仏になつてゆくといひ、まことの人生を生きてゆく道を、浄土に生まれてゆく道といひます。仏になるといひ、浄土に生まれるといひ、やさしく言えは、私がまことの人間になつてゆく、本当の人は、仏法を聴くこと、信心にめぐりてゆくことをお育てにあずかるといひます。

「この道をゆく」

安楽寺法要案内

--信楽峻磨前職七回忌法要--

日時 9月26日(日)
 12:00 勤行
 13:00 法話
 15:00 落語

※時間が変更になっております。ご注意ください。

ご法話講師 大阪 如来寺 先生
 講題 佛慧を味わう
 落語講師 林家染雀 師匠
 講題 仏縁を楽しむ

--顕真・永代経法要--

日時 10月16日(土)朝席・昼席
 朝席10:00～ 昼席13:00～

講師 東広島 明宝寺 先生
 講題 よりよく生きる

--報恩講法要--

日時 11月20日(土)朝席・昼席
 朝席10:00～ 昼席13:00～

講師 岐阜 願誓寺 先生
 講題 信楽峻磨先生の教えの要

※会場は、基本的には安楽寺と致しますが参拝者の人数や、感染状況によって変更になる場合があります。

暮らしの中の仏教語

「醍醐味 (だいごみ)」

「ホームランこそ野球の醍醐味だよ」と、何ものにもかえられない楽しさ、真骨頂、妙味を醍醐味といっています。ゴルフの醍醐味、スキーの醍醐味という具合です。

『涅槃経』というお経に「五味」が説かれています。それは「牛乳を精製していくと、その味は、乳味↓酪味↓生酥味↓熟酥味と、しだいに美味なものに変化し最後の醍醐味になると、最高の味となる。その最高の味こそ涅槃の境地である」というのです。

また、仏の最上の教法にたとえる場合もあります。醍醐味はインドの言葉で「サルピス」といい、純粋なバター状のものでしたそうですがこのサルピスにカルシウムを加えて「カルピス」という名がついたと聞きました。

いずれにしても、醍醐味が満喫できれば、大変幸せなことです。今回エンゼルスの大谷翔平選手が大リーグのオールスターゲームに出場し、日本人初のホームランダービーにも出場しました。野球ファンのみならず、日本人には何ものにもかえられない楽しみだったことでしょう。